

課題番号：20 委-2

研究課題名：摂食障害の疫学、病態と診断、治療法、転帰と予後に関する総合的研究

主任研究者：切池信夫

分担研究者：石川俊男、小牧 元、本郷道夫、井上幸紀、福居顯二、坪井康次、赤林 朗、宮岡等、上原 徹、岡本百合、中里道子、渡辺久子、傳田健三、瀧井正人、野間俊一、永田利彦、武田 綾、成尾鉄朗、鈴木(堀田)眞理、

1. 平成 21 年度の成果

学校保健現場において、成長曲線による低体重と徐脈が AN の早期発見の身体指標となり、早期発見・治療を行う上での有効性が示唆された。さらに重症例には小児科での ICU 集中治療を行い、患児が初期に病気を認め、安静臥症を保ち、規則的栄養摂取を受け入れるよう導くことが有効であった。一方働く女性の 0.5% に AN、0.22% に BN が疑われた。摂食障害患者 61 例中、広汎性発達障害が 6.6%、注意欠陥多動性障害が 34.4% に疑われ、これらの発達障害を呈していない患者においても高い自閉性を示した。摂食障害患者 196 例のうち 16.8% に全般性社交不安障害の併存を認め、摂食障害に先駆けて発症していた。近赤外線分光法 (NIRS) による研究で前頭葉賦活課題遂行時に前頭葉機能の低下を示した。fMRI による研究では摂食障害特有の変化が認められ、治療有効性の評価に用いられる可能性が示唆された。摂食障害患者において認知柔軟性、セントラルコヒアレンス、決断能力の障害が認められた。AN 患者における副交感神経機能の亢進、交感神経機能低下し、心拍のゆらぎが white noise に近くあった。AN 患者に対する心理教育 CD ソフトが開発され、これが患者に有用であり、2009 年 9 月より日本摂食障害学会 HP に掲載された。重症 AN の入院治療において、行動制限をとまなう経口摂取により、Refeeding syndrome などの重篤な身体合併症を予防できた。長期入院治療の比較で

短期入院でも良好な転帰を示す患者がいることが示された。BN 患者に行動制限を用いた 4 週間の入院治療プログラムでも有効な患者がいた。地域作業所でのリハビリテーションが、摂食障害患者の社会復帰に良い影響を及ぼした。摂食障害治療における医療連携について、年間 10 名以上摂食障害患者を診療している 107 施設 (88.4%) が (条件付きも含めて)、救命救急センターからの相談要請に協力できると回答した。

2. 平成 22 年度研究計画と期待される研究成果

現在進行中の研究を継続することでさらなる結果が得られる。さらに日本摂食障害学会の協力のもと全国規模の摂食障害の疫学調査を予定しており、我が国における摂食障害の有病率が明らかになる。

3. 行政施策への貢献度

治療ガイドラインの改訂と普及、病態に応じた治療ネットワークの確立をめざしており、行政施策への貢献度は少なくないと考えられる。

4・研究発表

1) Brain activation during the perception of distorted body images in eating disorders, 181, 2010

2) ひきこもる摂食障害を就労支援へつなげることでできた 2 症例、精神医学、52:17-24、2010

4) DVD『拒食症の家族教室 vol.2 対処編』、2009

その他 8 つ

